英雄像の形成
――「三徳」をめぐって――

石黒吉次郎

一

延元元年（一三三六）四月、九州に逃れていた足利尊氏は兵をまとめて弟直義とともに東上を開始した。これに対抗し京都から新田義貞・楠木正成らが西下した。五月両者は摂津の湊川で交戦、圧倒的な足利軍の前に、新田・楠木軍は敗れ、義貞は京都へ敗走し、正成・正季兄弟は自刃した。神田本『太平記』巻十六楠正成自害の事は、正成が死去した後に、次のような感想を記す。

然ルヲ此乱不慮ニ又出来て後、不知耻ヲ者ハ朝恩ヲ棄テ忽ニ敵軍ニ属シ、無勇者ハ苟モ死ヲ遁ンとて却ツて刑戮ニ逢ヒ、時ノ変ヲモ弁ヘスシテ、道ニカナハヌ事のみ多かるに、仁智勇ノ三徳ヲ兼て死ヲ善道ニ守り、功ヲ天朝ニ施ス。古より今ニ至る迄、此正成ほとの者は未たなかりつるに、[1]

正成は仁智勇の三徳を兼ねた理想的な人物とされて讃えられるが、この文章については同じく『太平記』の古本玄玖本の方が意味は明瞭である。すなわち巻十六経ノ島合戦之事付正成自害之事に、

然共此乱不慮ニ又出来テ後、耻ヲ不サル知ハ朝恩ヲ捨テ忽ニ敵ニ属シ、勇無キ者ハ死ヘキ事ヲ恐テ降人ニ出テ刑

戮ニ逢ヒ、智無キ者ハ時ノ変ヲ不弁シテ道ニ違タル事ノミ多カルニ、仁智勇ノ三徳ヲ兼テ死ヲ善道ニ守リ、功ヲ天朝ニ施コト古ヨリ今ニ至テ此楠正成程ノ者ハ未在ス、(2)

とある。また西源院本『太平記』巻十六尊氏義貞湊河合戦本馬重氏射鳥並正成討死事では、この箇所は次のようになる。

然而又此乱出来テ後、仁ヲ知ヌ者ハ朝恩ヲ棄テ忽ニ敵ニ属シ、勇ヲ得サル輩ハ苟クモ死ヲ遁ムトテ還テ刑戮ニ遭フ、智ナキ者ハ時ノ変ヲ不レ弁シテ自迷ヒ進ミ退ク処ニ、智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守リ、功ヲ天朝ニ播事ハ、自レ古至レ今正成程ノ者ハ未レ有、(3)

ここでは玄玖本に見える「耻ヲ不サル知ハ朝恩ヲ捨テ忽ニ敵ニ属シ」という表現などが、「仁ヲ知ヌ者ハ朝恩ヲ棄テ……」となって、「仁」「勇」「智」を揃えている。さらに「智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守リ」として、他本の「仁智勇」から「智仁勇」と順序を入れ替えており、こちらの方が語呂は良くなっている。以後はこの「智仁勇」が主流となるようで、天正本『太平記』巻十六楠正成兄弟以下湊川にて自害の事にも、

仁を知らざる者は朝恩を棄てて敵に属し、……智仁勇の三徳を兼て、死を善道に守る者は、古より今に至るまで、この正成程の者はなかりつるに、(4)

とあり、古活字本などの流布本においても同様となっている。西源院本については、「神田本や玄玖本などとはかなりのずれを見せ、たとえば正成の描き方に成長が見られ、講釈として用いられたものか文体は口語の色を濃くしている」(5)ともされており、こうした天正本の性格から、このテキストにおいていよいよ楠木正成が智仁勇の三徳を兼ねている人物として、表現が整備されたのであろう。

西源院本を中心に見ると、正成が仁なる所以は、朝恩を最後まで忘れず忠勤を励んだことであり、勇なる所以は決

して死を恐れなかったことであり、智なる所以は時の移り変わりをよく察して道理にかなった行いをしたことであった。彼は正しい死の道を守った人物として激賞されている。正成はのちに手強い怨霊となるのであるが（流布本の巻二十三大森彦七が事）、ここには彼に対する深い哀悼の意とともに手厚い鎮魂の意識があるように思われる。

「三徳」にはいくつかの種類があり、『書経』や『周礼』のほか仏典にも見えるが、ここでいう智仁勇の三徳とは、『中庸』に「知仁勇三者、天下之達徳也」と見えるものである。わが国への影響では、『懐風藻』の大伴旅人の詩「初春侍宴」に、「穆穆四門客。済済三徳人」と見え、この「三徳」が知仁勇の三徳を指すかとされる(6)。北畠親房の『東家秘伝』には、

解曰。如レ玉曲妙ナルハ柔順ノ心ヲ表シ給フ。如レ鏡ニシテ分明ナル正直ノ心ヲ表シ給也。心ノ本元ナリ。如レ剱剛利ナルハ決断ノ心ヲ表シ給也。智也。勇也。尚書ニハ剛柔正真三徳トモ云。礼記ニハ知仁勇ノ達徳トモ云。其義皆一也(7)。

とあるが、これは三種の神器を知仁勇の三徳で説明したものである。このうち『尚書』洪範の三徳は正直・剛克・柔克であり、『周礼』地官の三徳は至徳・敏徳・孝徳である。親房は『礼記』に知仁勇があるとし、『中庸』との混乱が見られる。しかしこの時代、知仁勇の三徳が関心を持たれていたことは察することができる。

室町時代、智仁勇が勇敢な武将を讃える誉めことばとして流行したらしいことは、いくつかの文献に見える。応仁の乱を叙述した『応仁記』巻一熊谷訴状之事には、次のような話が見える。

其比、近江国塩津ノ住人ニ熊谷ト云テ奉公ノ者アリ。智仁勇ノ三徳ヲ兼備ヘテ、文武二ノ道ニ惑ヲ不レ懐者ナリシカ、御政道ノ不正事ヲ悲テ、密諫言ヲ綴テ捧ニ一紙之状一。義政将軍、此由ヲ御覧セラレ大ニ瞋曰、「其諫処ハ一トシテ道ニ雖レ不レ違、其司ニ非スシテ法ヲ行ヒ、諫言ヲ納ル条、其狼籍是ニ過ル事有ヘカラス。夫、史記ニ

云ル事アリ。『其人ニアラスシテ其官ニ居ス、是ヲ謂ニ乱夫之事一。』彼其為レ最。早没ニ収所領一、可レ追ニ出其身一」トソ被ニ仰出一ケル。君子不レ恥ニ下問一ト云々。諫ヲ拒命ニ違ハ、帰ニ於乱一云ヘル理ヲ不知コトハ、武将ノ成敗ノ程コソ方見ケレト人々申アヘリ。(8)

近江の塩津の住人熊谷某は、文武に優れた武士であったらしいが、時の政治に疑問を抱き、将軍足利義政に諫言の状を提出した。しかるに将軍は、その任に当たっていない者がかくするのは狼藉であるとし、その所領を召し上げ、その身を追放してしまったという。『応仁記』の作者は、熊谷が正義のために行動し、結果として悲運に見舞われてしまったことに同情し、「智仁勇ノ三徳ヲ兼備ヘテ」と最大級の賛辞を送ったのであろう。それは楠木正成がやはり道理を貫こうとして努力し、結局は戦死に追い込まれてしまった運命にも似るものであった。熊谷へのこの賞賛のことばは、『太平記』の楠木最期の箇所に影響されたことも考えられる。この場合「智仁勇の三徳」は道理のために不幸となった英雄への鎮魂の意味があることになるであろう。これらの例からすると、智仁勇の「仁」とは主君に道理に基づいて諫言し、忠節を尽くすことという意味が強いように思われる。楠木正成も湊川の戦に出陣する以前に、朝廷に対し、一旦尊氏軍に京都を明け渡し、そののちこれを兵糧攻めにする策を進言し、公家達に拒否されたのであった（『太平記』）。

もうひとつの「智仁勇の三徳」の例は『塵塚物語』に見える。巻五細川武蔵入道事に、

いにしへ細川武蔵入道常久は、知仁勇の三徳を兼備して、四海第一の勇士なりといへり。(9)

として、管領となり将軍足利義満を補佐した細川頼之について、以下のような話を載せている。

ある時頼之は義満の月見の会の席に列し、主君に対してたいへん乱暴な諫言をした。このため将軍は立腹し、しばらく勘当ということになったので、頼之は仕方がなくほかの国に蟄居し、のちに出家して常久と称した。そ

の後許され、再び執事の職に就いた。これは諸書に見えるが、これには深い意味がある。頼之は義満の幼少の頃からこれを補佐して重要な立場にあったため、天下の人々に媚をもって従われていた。けれども頼之は決して驕ることなく庶民を撫育し、忠烈に励んだ。この結果将軍の威光は蛍火のように小さく、頼之の栄光は太陽のように大きくなった。これを憂えた頼之は、ある夜ひそかに義満に会い、しばらく自分が恥を得て蟄居し、将軍の思慮の深さを諸人に知らしめ、君臣の道をより完全なものにしようと進言した。これが容れられ、この勘当の事件が起こったのである。この事情は天竜相国の記物の中に見える。

そして、最後に

事実におゐては、むかしより今の世までのあいだに、ためしなかるべし。およそかやうなるふるまいは、正成か頼之ならでは、およぶまじき事に申あへり。

と結んでいる。この逸話は頼之のたいへん思慮に富んだ忠節ぶりを讃えたものであり、その忠義は後醍醐天皇に対する楠木正成のそれを思わせるものであった。そのために頼之は「知仁勇の三徳を兼備し」た「四海第一の勇士」と評されたのであった。「智仁勇の三徳」は楠木正成にぴったりのことばとして人口に膾炙し、それが『塵塚物語』に見えるような頼之の評価にも影響を及ぼしているのであろう。頼之の行動も『応仁記』の熊谷と同じく、主君に対する諫言の話で、室町時代においては、智仁勇の三徳は、具体的には我が身を顧ない犠牲的な精神を持ち、主君に諫言をするような人物のイメージが強かったのではないかと思われる。そしてあきらかに「智仁勇」は、この時代の理想的な武士を言い表すことばのひとつであった。

二

室町時代の勇者像はこうした儒教的な意味が付与され、より整備された形に変貌していると思われる。そして『平家物語』等の従来の軍記物語に見えるような単に剛勇な人物というだけではなく、知恵に富んだより思慮深い英雄が造形されるようになってゆく。そのような英雄は、『太平記』に散見する。たとえば西源院本の巻十三中先代事付兵部卿親王奉害事には、次のような話が見える。建武二年（一三三五）七月中先代こと北条時行が信濃で反乱を起こし鎌倉に向かってきた。足利尊氏の弟で、鎌倉で東国の成敗に当たっていた左馬頭直義は、将軍の宮をお連れし、一旦鎌倉を落ち延びることとした。この時直義は、鎌倉に幽閉されていた兵部卿の宮護良親王を勅許なしに暗殺することを思いつき、淵野辺（淵辺義博）にこれを命じた。牢の中にいた親王は激しく抵抗し、親王は淵野辺の刀の先を口に含んで争ううち、その刀の先一寸ばかりを食いきってしまった。淵野辺はその刀を捨て、脇差の刀で親王を刺して殺害し、その首を掻き落とした。護良親王の首は、口中にいまだ刀の先を含み、眼は生きていた時のように開いていた。淵野辺はこれを見て、「猿事有、加様ノ首ヲハ敵ニ見セヌ事ソトテ、ソハナル籔ノ中ヘ投捨テソ帰」ったという。西源院本『太平記』はこれに続いて、干将鏌鋣事の項を設け、その間の事情を次のように説明する。

淵野辺が宮の首を直義に見せず、これを籔の中に捨てたのは、いささか思うところあってのことである。周の時代、楚王の后は鉄の柱に寄って懐妊し、鉄の丸を生んだ。王は鍛治の干将に命じてこれから剣を作らせた。ふた振りの剣ができたが、干将の妻鏌鋣はその一つを我が子のために乞い、干将は雄剣を王に差し上げ、雌剣を妻に与えた。雄剣が雌剣を恋うて泣くので、王は干将の隠し事を知り、これを殺させた。その後干将の男子が生ま

れ、眉間尺と呼ばれた。彼は父の仇を討とうとして楚王と戦った。父の友人である客の計略に従うこととし、眉間尺は雌剣の先三寸を食い切って口中に含み、自分の首を掻き切った。客がこの首を王に差し上げると、王は喜び、これを獄門に掛けた。その後王がこの首を見ると、首は三寸の剣の先を吐き出し、王の首を掻き切った。淵野辺はこうした故事を思い出し、護良親王の首が刀の先を吐き出し、直義を害することを恐れ、これを籔に捨てたのである。

この話は流布本系統にも見える（巻十三兵部卿薨御の事付けたり干将莫耶事）。眉間尺のことは『法苑珠林』巻二十七、『捜神記』、『宝物集』巻五等に記されている。また御伽草子「土蜘蛛の草子」にも源頼光が、眉間尺が始皇帝の命を狙った故事を思い出す箇所がある。

『太平記』の護良親王殺害の条では淵野辺も親王もたいへん剛勇で、ふたりの死闘の叙述は迫力に富んでいる。淵野辺はしかし単に強いだけではなく、眉間尺の故事を知っていて後難を恐れる思慮深い人物であったと造形されている。あるいは護良親王もまた眉間尺の計略のことを知っていて、直義を殺害することを考えたと暗に作者は言いたいのかもしれない。こうした知恵にも恵まれた英雄像の造形には、中国の英雄譚の影響も見逃せないことであろう。日本の軍記物語では以前から中国の英雄譚が流行していた。ことに多く見られるのは前漢の建国に功績のあった張良の話で、黄石公から太公望の兵書を授けられたというもので、『保元物語』巻上、『平治物語』巻上、『太平記』巻八、能「鞍馬天狗」などに見える。こうした中国の英雄像は我が国における英雄造形にも影響を及ぼしている。たとえば金刀比羅本『保元物語』巻上新院御所各門々固めの事付けたり軍評定の事には、

今の為朝は勢力すくやかにして、強楚が貫山の勢にもをとらず。弓の手こまやかにして、養由が百歩の芸にあひおなじ。張良が帷帳のうちのはかりこと、紀信が乗車のいさみ、只一身に数芸をかねたれば、猛畧の武道さなが

ら古今の間に独歩せり。人目をおどろかし、舌をふらずといふものなし。[10]

とある。源為朝はその勢いは楚の項羽の如くであり、弓の威力は養由並みであり、計略の巧みさは張良のようであり、紀信並みに忠節・勇気を持っていたという。こうした中国からの影響は『太平記』の時代に至ってより充実してゆき、さらに儒教的な三徳などが加わって、整備した形を示すようになったものと思われる。そのきっかけをなしたのは、楠木正成の生きざまであり、彼の一生は人々に強い感銘を与えていた。

室町時代の英雄造形の例として、物語ではあるが、御伽草子「酒呑童子」における源頼光の英雄像を考えてみよう。摂津源氏多田満仲の長男であった頼光は、説話集にその武士としての優秀さが記されている。『今昔物語集』巻二十五・六話は、三条院の東宮時代、頼光が東三条殿で狐を射た話である。この時頼光は、これは源氏の守護神八幡宮が射させてくれたもので、自分が射た矢ではないと言い、その謙虚さ、信仰心も世間で評判になったという。頼光は武士として有能だけではなく、確かに思慮に富んだ人物であったようである。『古事談』第二頼光、息男ノ蔵人補任ヲ申シ返ス事には、頼光の子息が蔵人に任じられたことを藤原知章が聞き、我が子が昇進しないのを嘆いた。頼光はこれを知って子息の補任を辞退したとある。これも頼光の人柄を伝える説話である。『古今著聞集』巻九源頼光鬼同丸を誅する事は、頼光がその配下の四天王とともに鬼同丸を討ち取る話である。最初鬼同丸は頼光の寝ていた部屋の天井に隠れ、上から頼光を襲おうとした。頼光もただの人ではなかったので、早くこれを悟り、「天井に、いたちよりも大きに、貂よりも小さきものの音こそすれ」と言って渡辺綱らを呼んだ。このため鬼同丸はここを去った。頼光は武芸に優れているのみならず、ライバル関係にある者を思いやる情もあり、また危機を事前に察知して、これから脱する智恵も持っていたことになる。こうして智仁勇的なものを備えていた頼光は、中世において英雄として蘇る資格を十分に備えていたと思われる。こうした智仁勇の三徳を兼ね備えた人物こそ、中世においては理想的な英雄と

されるようになるからである。

中世に蘇る英雄としては、坂上田村麻呂も重要である。御伽草子「田村の草子」は、田村俊仁が陸奥のあくるわう（悪路王）を退治したり、俊仁将軍の子田村丸（俊宗）が伊勢の鈴鹿山に住む鬼神を、鈴鹿御前という天女とともに退治したりする話である。『田邑麻呂伝記』には田村麻呂の性格を「怒而廻眼、猛獣忽斃、咲而舒眉、稚子早懐」と記す。すなわち怒ればその恐ろしさに猛獣もたちまちに倒れるが、笑えばその愛情の深さに子供もすぐなついてしまうのであった[11]。田村麻呂も剛勇でありかつ人に深い愛情を持つ人物であったことになる。室町時代の庶民的な文芸の中で、強くてやさしい男性は、大衆好みの英雄として成長してゆくのである。

頼光の物語における活躍は、御伽草子「酒呑童子」や同「土蜘蛛」等に見られるが、まず「酒呑童子」に拠って、その英雄像の意味を考えてみよう。テキストの古いものから考える。

①　逸翁美術館蔵古絵巻「大江山酒天童子」

（都での酒天童子による婦女誘拐の連続事件に手を焼いた――巻頭欠落）朝廷は、摂津守頼光と丹後守藤原保昌を起用する。諸社に祈願ののち、ふたりは渡辺綱らを伴い、皆山伏姿となって、大江山の酒天童子の住処に向かう。首尾よく童子と対面した面々は、酒宴ののち、諸神の助力のもとに童子を討ち取るというものである。この絵巻では、慈覚大師の弟子で、御堂入道殿の子息が酒天童子に囚われ、鉄石の中で法華経を読誦しているといった比叡山の法華信仰や、安倍晴明を「秘密真言の棟梁、竜樹菩薩の変化」（別巻詞書）とするなど、宗教的な要素が色濃く、頼光の英雄造形はいまだ豊かではない。

②　慶応義塾図書館蔵絵巻「大江山しゆてん童子」

この絵巻では、頼光の英雄造形が進展している。しゆてん童子の跳梁に困った朝廷は、頼光を召すが、その武勇ぶ

りについては、「らいくわうこそ、まうほん、ふりやく、世にすくれ、神にもつうし、へんけのものゝ、おそれすといふこと、なかりけれは」と評される。これとは対照的に、しゆてん童子の方は人を食らう恐ろしさがある反面、知恵のない浅はかな性格も持つことが描写される。童子は山伏姿の頼光ら六人と酒宴を催すが、酒を強いられ、次第に通力を失い、「うち見には、おそろしけなれと、なれてつほいは、やまふし」と二三辺奏でることになる。英雄像の描写が豊かになるにつれ、これに退治される怪物の性格描写も充実してくることとなる。頼光の配下綱としゆてん童子の配下の鬼いらゝきのやりあいも興味深い。いらゝきが「あたらしき、宮このさかな、こゝにきて、えひをすゝむる、秋の山風」と舞い奏でると、綱も「としへたる、おにのすみかに、風あれて、花はのこらすちりやうせなん」と舞い奏でて対抗する。ここには両者の知恵比べがあり、これは物語の主人公であるしゆてん童子と頼光の知恵比べの代行と言えるものであろう。

③　麻生氏所蔵巻子本「大江山酒典童子」

このテキストでは被害者の主要人物として池田の大納言国かたが設定され、その姫君が失踪したため、安部晴明に占わせることから話が本格化する。物語としてめりはりに富み、より完成度の高いものとなっている。頼光が討伐を承り、配下の四天王を呼ぶ。保昌は丹後守なので、案内のために加わることになる。ここでは頼光の智恵の深さが強調される。

おもふ子細あれは、たゝ六人の外、随兵一人も具せす、鬼か城へ、しのひ入へし、たとへ、ゆうまう、ふんとの、鬼なりとも、かれは、鬼畜の身、人間の智恵には、をよふへからす、はるかに、なむそ、かたからむ、いかにも、をんひんにう和の、儀をもつて、たはかり、童子にたいめんし、ひんきよくはうつへし、[12]

頼光は童子は鬼畜であるから、その智恵は人間に及ばないのだとし、あくまでも計略によって、これを討つことを

計画する。頼光は武勇よりも智恵によって英雄化がなされている。これに対する酒典童子も強力であるという。

才智かしこくして、人をさつする事、かゝみにかけたるかことし、りきりやうたくましくして、いかなる太山をわきはさみ、北海をこゆるとも、たやすかるへし

童子は台風なみのパワーを持つだけでなく、才智にたけた鬼神であるとされるのである。山伏姿の六人は酒典童子の岩屋に入り、鬼達と酒宴となる。ことに荒々しい鬼が立って舞い奏で、六人を食ってしまうと脅す。これに対し公時が立ち上がり、舞い奏でて鬼共を退治することをほのめかす。手下の鬼共は六人に不審を抱き、頼光達ではないかと疑い、これを童子に進言するが、童子に一蹴されてしまう。知恵比べはここでも頼光・童子から公時・配下の鬼共に移行しているのである。そののち、頼光は無事童子を退治する。

④　渋川版「酒呑童子」

このテキストでは、さらに頼光達と酒呑童子達の知恵比べの要素が強くなっている。まず、池田中納言くにたかの娘が酒呑童子にさらわれたことが物語の発端となっている点が前記のテキストと同様である。頼光ら六人は山伏姿で童子の岩屋に入り、酒宴となる。酒を好む童子は、うれしさのあまりに自分の素性を語り、ただ恐ろしいのは源頼光とその四天王であると告白したのち、頼光達の姿を見据え、お前たちは頼光一行ではないかと騒ぎ出し、席を立とうとする。頼光は少しも動ぜず、からからと笑い、山伏修験道の知識を披瀝して信頼に勤め、山伏の行として命はすぐにでも差し出すと大見得を切る。このあたりは迫力に富み、また内容的にも面白い読み物となっている。能「安宅」の弁慶あたりからの影響であろうか。童子はすっかりだまされ、「馴れてつぼいは山伏」と歌い奏で、大いに酒を飲んで前後不覚となる。すなわち渋川版では頼光の知恵・知略が読み所で、それがこのテキストにおける彼の英雄像の特徴である。鬼神の人のよさ、単純さ、滑稽さは、英雄の豊かな才智の反対のものとして造形されるのである。つい

で配下の鬼石熊童子は舞い奏で、暗に山伏達を食ってしまうことをほのめかす。これに対し綱は立ち上がり、舞い奏で、鬼の岩屋を滅ぼすであろうと暗に宣言する。こののち頼光達は鬼共を滅ぼし、囚われていた姫君達を救出し、これを都に送ることになる。その姫君達の中には堀河中納言の姫君がいた。彼女は体を切られ、重傷でとても都へ帰れる状態ではなかった。このプロットも他のテキストにはない印象的な箇所である。頼光はいたく姫君に同情し、髪を掻き撫でて、いろいろと慰め、迎いの人をよこすことを約束する。頼光のこまやかなおもいやりが述べられる場面で、その「仁」の部分が強調されている所であろう。

このように「酒呑童子」のテキストをいくつか見てみると、頼光の英雄像は武勇に知恵の部分が加わり、さらに人に対する愛情が付与されて、智仁勇的に成長してゆくのである。そうした頼光の英雄としてのイメージは、近松門左衛門の浄瑠璃「嫗山姥」に引き継がれる。この作品は坂田公時の出生譚や、頼光とその四天王が世に出る経緯を描いたものである。四段目源頼光道行では、頼光が流浪の旅に出、山賊に出会う。この山賊は頼光の威勢に恐れをなし、家来となり、卜部季武と名づけられる等のストーリーが続く。山賊は頼光と対面して、

今はたまりかね柄に手をかけぬかん。〳〵ともがけども神武智勇の名将の。三徳兼備の威におされ眼もくらみ腕しびれ。[13]

となった。頼光は智仁勇の三徳を兼ねた英雄とされたのであった。ここに正成のような前時代の我が身を省みず忠節を尽くし、三徳を兼備する実在の人物像と、物語的英雄像が合体しているのを見ることができる。智仁勇は英雄・豪傑の代名詞のようになってゆくのである。

このように「酒呑童子」諸本においては、頼光の英雄像の進展が見られ、それに伴って英雄とは反対の極にある鬼神の性格についても、より豊かに造形されてゆくのである。

さらに御伽草子におけるもうひとつの頼光物である「土蜘蛛」について見てみよう。これは「酒呑童子」ほど頼光の英雄像が進化していない。まず東京国立博物館蔵の古絵巻「土蜘蛛草紙」は、頼光と綱が京都の蓮台野でひとつの髑髏が空を飛ぶのを見、これを追って神楽岡にいたる。そこには古い家があり、中に二百九十歳という老女がいる。老女は我が身を嘆き、往生を願う。やがて夕闇が迫り、異類・異形の者共や顔二尺、たけ一尺の尼が現われる。暁になって、今度は美女が現われ、鞠のような白雲を投げかけて頼光を攻める。頼光がこれに切りつけると、女は姿を消す。頼光の太刀は先が折れる。女の流した白い血の跡を尋ねて、ふたりは西の山へ分け入る。綱は中国の眉間尺の故事を思い出し、人形を作って、これを前に立てて進む。そこで大きな山蜘蛛を発見、ふたりはこれを退治する、というものである。

全体的に能の「黒塚」にも似ている構想で、この物語は「黒塚」に影響を与えているように思われる。ここでは綱が頼光にかわって知恵を発揮することが注目される。すなわち眉間尺の例を考え、危険を回避しようとしたのである。室町時代物語においては、このように英雄や英雄に退治される鬼神に代わって、それらの配下の者が知恵を代行する傾向がある。これは『義経記』において、義経に代わり、弁慶が知略を発揮する構想にも見出すことができる。主従間で智仁勇的英雄の一種の分業がなされていると言えよう。こうして第二・第三の英雄が派生してくることになる。綱の忠臣ぶりも強調されるところで、「忠臣は両君につかへす、かうちよはしゆに□す、といふことあり、いかてか命をそむき、さらに恩をわするへきとおもひて、雨にぬれ、風にしほれて、ゐたり」と記される。

慶応義塾図書館蔵の絵巻「土蜘蛛」では頼光は、

身すくやかにして、心たけく、ちから人にすくれ、玉しゐよにこえたり。弓馬のたつしや、ちほうのめいしん、うち物、はやわさ、神変をえたまへりしうへ、詩哥くわんけんの道にもゆふちやうなり、(14)

と評される。力が強く、肝魂がすわり、知略・武芸に優れ、しかも詩歌管絃にも詳しいという、「文武の徳をかねた人」とされる。この文武二道の理想的武将とは、『平家物語』巻七願書に、木曾義仲の手書覚明が新八幡に捧げる願書を書く様を評して、「あッぱれ文武二道の達者かなとぞ見えたりける」とあるように、智仁勇兼備の勇士よりは、古いタイプの武将の理想像である。このタイプの武将は『平家物語』には平忠度など散見する。より王朝的な価値観の英雄像である。これに比較すると智仁勇の英雄は儒教的で、『太平記』時代にふさわしい新しいタイプの英雄像ということができる。この「土蜘蛛」ではまず上巻で頼光が夢告によって太神宮から名剣を得たこと、養由の娘椒花女から有名な弓矢を授けられたこと、八幡神より黄石公から張良にわたった兵書一巻を与えられたこと、そして公時・貞光・季武の三人の勇士を求め得たことを記す。この巻では頼光が優れた武具や兵法を身につけ、勇者の家臣を得て、英雄としての条件を揃えてゆく過程を描いている。巻下では渡辺綱が新たに配下に加わり、これらが四天王と呼ばれたこと、古参の公時が綱を疎ましく思い、綱に勝負をしかけたこと、その後両者は仲直りしたことを述べる。ついで頼光が病気にかかったこと、その病床に色の黒い法師が現われ、千尋の縄で頼光を縛ろうとしたので、頼光が太刀でこれに切りかかったところ、法師は姿を消したこと、四天王が頼光の命により、変化の物の血の跡を尋ねて葛城山に至り、一丈あまりの蜘蛛の形をした法師を退治したことを語る。すなわちこの絵巻の「土蜘蛛」でも英雄的な働きをめぐって主従間の分業がなされている。むしろ英雄的行為の主体は主人公からその部下へと移行してしまっていると言ってよいであろう。

この傾向は能においてさらに顕著である。能「土蜘蛛」ではやはり僧形となった土蜘蛛が病気の頼光を襲い、頼光に切りつけられる。頼光の命を受けた家来のひとり武者（ワキ）は、ほかの武者を引き連れ、血の跡をたどって土蜘蛛の塚に至り、これを退治する。「草も木も、我が大君の国なれば、いづくか鬼の、やどりなる」と言って土蜘蛛を

誅伐するのは、頼光ではなく、その配下のひとり武者である。このひとり武者は四天王の中のひとりでもないらしい。頼光らによる酒呑童子退治を描く能「大江山」では、頼光一行の中に保昌と四天王のほか、保昌に仕えるひとり武者（ワキツレ）がおり、これが童子に真っ先に切りかかる働きをみせて活躍する。こうして英雄としての活躍は主君からその臣下、さらには末端の従者にまで移行するのである。それは『義経記』において、後半義経よりも弁慶がより中心的存在となることに典型的に現われる。これは新しい英雄のタイプを求めるとともに、英雄的主人公の活躍というテーマよりは、それに仕える臣下の忠臣ぶりへと物語的関心が移っていったことが考えられる。室町時代には儒教的な好みが物語に反映して、忠義が重んじられるようになったことによるかも知れない。またそこに漢の高祖に仕えた豪傑樊噲の忠臣ぶりなど、中国の忠義の臣下の故事が影響したとも見られる。また能の作品を見ると、「朝長」や「清経」など、それほど中心的な存在ではなかった人物も能の主人公として取り上げられている。室町時代は大英雄が蘇るほか、新たな小英雄の発掘の時代でもあったと言えるであろう。それは戦乱が多く、世情不安であったこの時代の雰囲気を反映していることが想像されるのである。

三

さて前節までにいくどか登場した弁慶について、智仁勇の観点からその英雄像形成の意味を考えてみよう。

まず『弁慶物語』であるが、ここでは弁慶は稚児時代、若一殿と称して比叡山西塔で過ごしたが、読み書き学問から詩歌管絃に明るく、武芸の達者であったとしている。すなわち文武両道的な存在であった。その後自剃りして武蔵坊弁慶と名のり、各地で乱暴を働き、洛中で人の太刀を奪い、義経と闘い、これに敗れてその臣下となる。その後の

弁慶は極めて忠節を尽くす人物となる。その師西塔の慶俊は、弁慶を捕らえようとする清盛の命によって囚われる。これを知った弁慶は、師を助けようとし、「止め給ふは三世の主君、行くは三世の師匠のためと、邪見放逸の弁慶も、一字千金の御芳恩を思へば」[15]と、六波羅へ駆けつけ、自ら捕らわれる。平家は弁慶に恩賞をもって義経の居所を白状させようとするが、弁慶はたばかられない。この師匠・主君のために忠義を尽くすさまが、この物語の後半の読みどころである。弁慶は六条河原の処刑の場から逃げ出す。物語の末尾は「三年の間に平家を平らげ、源氏一党の御代となし給ふは、九郎義経、弁慶が謀とぞ申しける。めでたかりし事どもなり」と結ばれる。この物語の究極のテーマは、義経と弁慶が武略・計略をもって日本を源氏の世にしたことにあり、ここに主従の英雄的行為の分業の形が見事に見られる。ふたりの関係は源頼光と四天王あるいは渡辺綱とのそれと相似のものである。弁慶の忠義を重視するのも、室町時代らしい儒教好みと言えるであろう。弁慶には、別の性格も付与されている。都三条の小鍛冶に太刀造りを依頼した弁慶は、製作の間、「内典、外典に暗からずして、もとより口は効きたり。真、空言取り混ぜて、天竺、震旦、我朝の事、なぐり語りに語りければ」とあるように、物語の語り上手でもあった。これは弁慶の物語がそうした語り手によって語られていたことを示すものであろう[16]。また弁慶の知恵の部分を強調しているのであろうと思う。

『義経記』においては、前半はやはり弁慶の乱暴ぶりを、そして後半は義経に対する忠臣ぶりが描かれてゆくが、ひとつの特色は弁慶の知恵・才覚を叙述し、読ませ所とする点にある。巻五吉野法師判官を追ひかけ奉る事では、義経一行が吉野山から落ち延びる際、弁慶は履をさかさまに履いて落ちることを提案する。義経がそのいわれを尋ねると、弁慶は、天竺の波羅奈国としらない国の戦いの故事を語る。人々は弁慶を「あはれ文武二道の碩学や」と賞賛し、弁慶も「我より外に心も剛に、案も深き者あらじ」と自称して、心静かに落ちたとある[17]。この物語においても弁慶は、文武両道的存在として造形されている。物語を語り歩く人々の知恵話がやはりこうした形で投影されるので

あろう。同箇所において、義経についても「九郎判官と申すは、鞍馬育ちの人なり。文武二道に心得たり」とあり、『義経記』においては、文武二道が英雄の理想的形である。

弁慶には滑稽な性格もある。巻三弁慶洛中にて人の太刀を奪ひとる事で、義経に「この程さる痴(をこ)の者ありとは聞き及びたるぞ」と言われ、巻五の吉野法師判官を追ひ奉る事でも、日高禅師に「これは武蔵坊といふ痴(をこ)の者奴が所為にてあるぞ」と評される通り、弁慶は痴の者でもあった。彼は吉野の川辺で乱拍子を舞い、「春は桜の流るれば、吉野川とも名付けたり。秋は紅葉の流るれば、竜田川とも言ひつべし。冬も末になりぬれば、法師も紅葉で流たり」というおかしい事を謡い、吉野の衆徒に「痴の奴にてあるぞや」とあきれられた。弁慶の滑稽さには、『義経記』成立以前の口承的笑話が影響しているのであろう。[18] また、弁慶は幼名を鬼若と称し、成人しては心の狂躁の者であって、これが源義経に征服されることになる。義経の完璧な英雄ぶりとは対照的に、弁慶は不完全な英雄としての役割を担わされる存在であり、それが弁慶の多弁さや滑稽性に現われると思われる。弁慶のこうした性格は頼光に退治される酒呑童子の人のよさ、滑稽性と共通するものと考えられる。

義経一行が山伏姿で奥州へ逃避行する旅は、苦難の連続で、弁慶が知略もってこれを切り抜けてゆくことが続いた。この部分は弁慶の博学ぶり、知恵の深さが読み所となる。それは諸国を廻る山伏の知恵、生活を感じさせるもので、同じく山伏姿で酒呑童子に接近する頼光にも見られるものであった。越中の如意の渡では、義経が判官殿と見咎められたため、弁慶が義経を扇でさんざんにこき伏せてみせた。のちに弁慶は、「何時まで君をかばひ申さんとて、現在の御主を打ち奉るぞ。天の恐れも恐ろしや。八幡大菩薩も許し、御納受し給へ」と言って、さしも猛々しい者ながら、さめざめと泣いた。そこには主君を愛する弁慶の深い心情が描かれており、我が身を犠牲にする忠義的な「仁」の精神があるように思われる。『義経記』には特に智仁勇三徳兼備ということばはないが、後半にかけて弁慶は

智仁勇を兼ねた英雄というイメージが強くなると言ってよいであろう。それは能「安宅」に受け継がれてゆくものである。また能「船弁慶」における弁慶像もこれらと重なる。弁慶は静との別れを惜しむ義経を諫め、また義経に襲いかかる平知盛の亡霊を「打物業にてかなふまじ」と、間に入って祈り伏せる。「船弁慶」は観世信光の作であり、「安宅」も信光の作かとされる。彼は弁慶像を智仁勇的な英雄としてさらに洗練していった作者のように思われる。

四

智仁勇の三徳ということばは近世においてさらに普及してゆく。伊藤仁斎の『童子問』第三十七章で、「忠信を主とするときは、則敬を用ゆることを要せざるか」という問に対し、これを否とし、聖人の教えは一端ではないとして、

故に或は曰、智仁勇、或は曰、忠信篤敬、或は曰、恭寛信敏恵、或は曰、忠信を主として義に徒る、と。[19]

とあり、聖人の教える徳のひとつとして、智仁勇をあげている。富永仲基の『翁の文』第八節にも、

孔子も孝弟忠恕を説、忠信篤敬をとき、知仁勇の三を三徳と名付、懲レ怒塞レ慾改レ過遷レ善とも説き、君子坦蕩々、小人長戚とも説かれたり。[20]

と見え、近世においては、智仁勇は忠信篤敬などと並んで、重要な徳目とされることがあった。

文芸では西鶴の『武道伝来記』巻一・第二毒薬は箱入の命に、

むかしの人の家の紋、橘山形部とて、奥州福島にて、出頭此ひとり、殿の御心底我物にして、御機嫌よろしければ、栄花の時をえて、武士の冥加にかなひ、一家中此人に思ひ付事、御威光ばかりにあらず。其身更に悪心な

く、智仁勇かねそなはりし人、今年廿五にして、なを行末頼母子[21]。

とあり、徳を身につけた理想的な武士の形容として智仁勇が用いられている。この場合は、楠木正成や細川頼之などの特別な場合とは異なり、より一般的な意味となっている。

馬琴の『椿説弓張月』残篇巻之三には、鎮西八郎為朝が「智仁勇あるものは讐を伐り、狐疑するものは身方を伐る」という場面がある[22]。これは智仁勇を備えた勇士は剣で正しく敵を斬るものであるが、反対に疑いやためらいの心を持つ者は誤って味方を斬ってしまうものであることを言っている。智仁勇を兼ね備えることは、正しい武士のあり方として考えられているのであろう。こうして近世においては、智仁勇の三徳は、より身近な徳目として定着するようである。

このように見ると、日本における理想的な武士の像には、「文武両道」のほか、「三徳」の系譜も重要であることが知られるのである。

注

(1) 国書刊行会本による
(2) 勉誠社本による
(3) 以下、刀江書院本による
(4) 新編日本古典文学全集（小学館）による
(5) 山下宏明校注『太平記一』（新潮日本古典集成　昭和五十二年）解説
(6) 小島憲之校注『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粋』（日本古典文学大系　昭和三十九年）補注

(7) 群書類従第二輯による
(8) 古典文庫による
(9) 日本随筆全集第十七巻による
(10) 日本古典文学大系（岩波書店）による
(11) 関幸彦著『蘇る中世の英雄達』（中公新書　平成十年）八二頁
(12) 室町時代物語大成第三（角川書店）による
(13) 日本古典文学大系『近松浄瑠璃集・下』による
(14) 室町時代物語集成第九（角川書店）による
(15) 新日本古典文学大系『室町物語集・下』による
(16) 岡見正雄「判官物語考―義経記に至る中世口承文芸史抄―」「国語国文」昭和十二年十一月号、同「物語より記へ―義経記に至る中世口承文芸史抄―」「国語国文」昭和十二年十二月号
(17) 日本古典文学全集（小学館）による
(18) 岡見正雄「座頭と笑話―義経記に至る中世口承文芸史抄―」「国語国文」昭和十二年八月号
(19) 日本古典文学大系『近世思想家文集』（岩波書店）による
(20) 同右
(21) 新日本古典文学大系（岩波書店）による
(22) 日本古典文学大系（岩波書店）による